

---

# 奇妙な同居

クラッキー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奇妙な同居

### 【Nコード】

N4494Z

### 【作者名】

クラッキー

### 【あらすじ】

朝、目覚めると、見たことがない天井が、視界に入ってきた。ここはどこだ？

強引で自己中心的な女性に振り回される男。高校時代の同級生の男が繰り広げる奇妙な同居生活。

男は誘惑に耐え、平穏な日常を取り戻すことが出来るだろうか？

やってしまった…のか？（前書き）

久しぶりの投稿です。

相変わらず、拙い文章ですが、暖かく見守って下さい。

やってしまった…のか？

朝、目覚めると、見たことがない天井が、視界に入ってきた。

ここはどこだ？

まず、自分の置かれている状況から把握しなければならぬ。

現在、寝ている場所は、フローリングの床に敷かれたカーペットの上。

毛布は掛かっているが、布団の上ではない。

この部屋は、殺風景だが綺麗に片付いている。

俺の部屋は、こんなに片付いていない。

ここは、俺の家ではないことを理解した。

そして、横に目をやると、昨日、俺が着ていたはずのスーツが、ハンガーに吊されている。

ということは、今、俺が身に付けているのは、Yシャツの下に着ていたTシャツとパンツのみ。

反対側に目をやると、ベッドがある。

一人用よりも、少し大きめのベッドである。

そのベッドには、この部屋の住人らしき人物が、頭まで布団を被って寝ている。

コイツは誰だ？

何となく、今、置かれている状況を理解し始めた時、目覚まし時計が鳴り響いた。

声を上げそうになるのを何とか堪え、ベッドの上の方に目をやると、布団の中から伸びた手が、目覚まし時計を止めようと、虚しく空をさまよっていた。

その手が何度か空を斬った後、布団の中から頭が出て来る。

そして、布団の中の住人は、目覚まし時計を止めると、再び、布団に潜り込んだ。

って、オイ！

また寝るんかい！

布団に潜り込んでいる、この部屋の住人らしき人物は、女性だと思われる。

布団から伸びていた手は細く、爪には剥がれかけのマニキュアが塗ってあった。

寝癖で顔までは確認出来なかったが、髪は長く、茶色かった。

俺は、コイツを知っている。

知らない奴の家で寝ていたら、それはそれで大問題なので少しホッとした。

そして、状況を整理する為に、昨日からの行動を一から振り替えることから始めなければならない。

俺の記憶が確かなら、今日は日曜日で、昨日は土曜日。

今日は休みだが、昨日は土曜日にもかかわらず仕事だった。

本来、土曜日は休みなのだが、休日出勤ってやつだ。

仕事を終え、出先から直帰したはずだ。

そして、重い足を引き摺りながら駅に着くと、駅のホームのベンチに、一人でポツンと座っている女性を見掛けた。

「ねえ、彼女！今、一人？暇ならどっか遊びに行かない？」

こんな風に女性に声を掛けることが出来るなら、彼女いない歴は年齢と一緒にあるはずがない。

例えそんな芸当が出来る人間だとしても、この時はそんな気力もない。

俺は、綺麗な格好をしているその女性が気になってはいたが、チラチラと遠巻きに見ているだけだった。

その女性の様子は、明らかに落ち込んでおり、ハンカチを握りしめている。

その視線は、一点を見つめたまま、焦点が定まっていないうつだった。

『ピンポン！間もなく電車が参ります！』

駅のアナウンスが流れた時、その女性がこっちを見た。

チラ見をしていた俺の視線と、見事に合ってしまった。

慌てて反らしたが、彼女には気付かれてしまったようだ。

すぐに彼女は、コツコツとヒールを鳴らしながら、近づいて来る。

やべえ、文句を言われるかも…。

案の定、そのヒーリング音は俺の横で止まった。

「なに見てんのよ!」

とは言われなかった。

しかし、彼女の視線は間違いなく俺を睨んでいる…、と思われた…。

「カワグチタク?」

「えっ!」

不意に俺の名前を呼ばれ、振り返る。

「やっぱりそうだ!タクちゃんじゃん!久し振り!」

久し振り!と言われても誰だか思い出せない。

「えーと…、誰だっけ?」

「はあ?覚えてないの?『親友』の顔を忘れるなんていい度胸だな、オイ!」

そう言われると同時に、脛を蹴られた。

「いてえー!もしかして、石崎香織か?」

懐かしい痛みと共に、名前を思いだす。

高校時代、よくこうやって脛を蹴られていた。

男っぽい口調の上に、口より先に足が出る奴は石崎しか知らない。

しかし、俺は彼女と親友になった覚えはない。

どちらかと言えば、苦手な部類だ。

ましてや恋愛感情なんて、とてもとても…。

「タクちゃん、仕事だったの？もう終わり？」

一応、俺の名前は川口卓カウケチスゲルである。

ただし、周りにスグルと呼ぶ奴は誰もいない。

友人だけでなく、会社の同僚、後輩も、『タク』、『タクちゃん』、『タクさん』と呼ぶ。

家族までもがそう呼ぶ。

高校時代、俺のことを『タク』と呼ぶ女子は、石崎だけだった。

そう考えると、彼女も友人の一人だったとは言えるかも知れない。

「家に帰るところだけど？」

「ちょうど良かった！ちょっと付き合いなさいよ。どうせ、暇なん

でしょ？」

そう言い終わる前に、俺は袖口を掴まれ、俺を引き摺るように、石崎香織は改札に向かって歩き出していた。

確かに暇ではあるが、俺に選択権というものはないのだろうか？

駅前の居酒屋に入り、高校時代の思い出話を肴に酒を飲む。

恋愛関係の話もした。

俺は、見栄をはって見たが彼女には通用しなかったようだ。

表立って指摘はされなかったが、彼女いない歴と年齢が一緒であることを、気付かれたと思われる。

石崎にも、そういう類いの話を突っ込んでみたかったが、何か得体の知れない物に止められた気がする。

酒はしこたま飲んだ。

飲んだと言うより、飲まされた。

無理やりではないが、石崎のペースに合わせたら、いつも以上に飲んでしまった。

石崎は酒が強い。

フラフラになりながら店を出た俺と違い、アイツの足取りは、かなりしっかりしていた…記憶がある。

終電には間に合わず、タクシーで帰る。

二人で一緒のタクシーに乗ったはず。

乗ったところまでは覚えている。

乗って…どうしたんだっけ、俺？

そのまま、石崎の家に押し掛けてしまったのか？

もしかして、やってしまった…のか？

俺の混乱に拍車がかかった時、もう一度、目覚まし時計が鳴った。

今度は、彼女の枕元ではなく、別の場所で鳴っている。

すると、布団の擦れる音がした後、タンツと床に足をつける音がした。

今度は起きるようだ。

足音がした方を見ると、女性らしい白くて細い足が、一歩踏み出そうとしていた。

ちよ、ちよつと待て！

そのまま行ったら…！

「グエー！」

「キヤー！」

ドタン！

男のうめき声と女の悲鳴、誰かが床に倒れ込む音が部屋に響いた。

俺は誰でしょう？（前書き）

初日は二話同時に投稿します。  
今後の更新は不定期です。

俺は誰でしょうか？

「グエー、ゲホッ、ゴホッ、ゲホッ！」

見事に腹を踏まれ、悶絶する。

「痛いなー、もー！何でこんな所で寝てんのよ！」

それは、こつちが聞きたいんだが…。

彼女は、床に打ち付けた肘やら膝やらを擦っている。

「人を責める前に、謝罪の言葉はないのか？」

どんな賤けをされてきたんだ、コイツは！

「元と言えば、アンタがいけないんですよ！」

それは、ごもつともですが…。

「ところで…、いくつか質問があるのですが…、よろしいでしょうか？」

ひとしきり悶絶した後、ようやく起き上がり、いくつかの疑問点を確認する作業を始める。

自分自身の混乱を収めるには、目の前の人物の記憶に頼るしかない。

「回りくどい言い方してないで、さっさと言いなさいよ！だから、モテないのよ！」

「大きなお世話だ！」

という言葉はグツと飲み込む。

「お前、県立A高等学校卒の、石崎香織だよな？」

「そうだよ。」

やっぱり、昨日、俺は石崎に再会した。

高校卒業以来だから、10年ぶりだろうか。

「俺は誰でしょうか？」

「誰って、タクちゃんでしょ？県立A高等学校卒で、彼女いない歴が年齢と一緒にカワグチタク。」

コラコラ、勝手に大袈裟な呼称を付け足すな。

それに、『タク』ではなく、『スグル』である。

コイツも、俺のことをちゃんと知っている。

「ここはお前の家だよな？」

「そうだけど…、何なの、さっきから！記憶喪失の振りでもしてるの？そんなことしても、昨日、アンタが犯した過ちは許さないよ！」  
過ちとは一体…。

「俺、昨日…、何かした？」

「はぁー？覚えてないの？アンタって最低！それ相応の責任はとってもらおうからね！」

俺はやはり…。

何ということでしょう。

肝心な部分を何も覚えていません。

「俺の方が責任とって…ブツブツ…。」

「ブツブツ言ってるんで、言いたいことがあるなら、はっきり言え！言い訳ぐらいは聞いてやるよ！許すかどうかは別問題だけど。」

断片的ではあるが、記憶が繋がると、冷静になってきた。

そして、目の前に広がる絶景…、もとい、光景に目を奪われる。

目の前には、寝巻き用と思われるＴシャツとホットパンツを着た若い女性。

Ｔシャツの上からでも、二つの大きめな膨らみが確認出来る。

ちよつと刺激が強すぎる。

そして、そのまま視線を下に動かしていくと、現わになった細く白い太もが…

「ぐわっ！」

「なに見てんのよ…！」

口より先に、彼女のそばにあったクッションが飛んで来た。

口より先に手が出るのは、悪い癖だと思うよ…。

取り敢えず、これから俺がとるべき行動を整理する為に、洗面所に逃げ込む。

だがしかし、整理しようにも、二日酔いで頭がガンガンして、全く整理出来ない。

浮かんで来るのは、先程の寝巻き姿の石崎ばかり…。

この時、俺が冷静ならば、あるいは、恋愛経験が豊富ならば、洗面所にあった、使い古された赤色と真新しい青色の二つの歯ブラシの

違和感に、気付いていただろう。

しかし、俺が気付いたのは、独り暮らしの女性にしては、石崎はい所に住んでいるということだけだった。

俺が洗面所から出て来ると。

「コーヒーと紅茶どっち？」

「じゃあ、コーヒーで。それから、冷たい水を一杯。」

「かしこまりました。お会計は一万円でございます。」

さすがに、ぼったくり過ぎである。

ここは、座っただけで、福沢諭吉が一枚なくなるぼったくりバーですか？

「ここって、最寄り駅はどこ？」

「T駅。ここから歩いて十分ぐらい。」

オイオイ、都会じゃないか。

しかも、駅前。

俺の最寄り駅とは二駅しか離れていないが、駅の規模は雲泥の差だ。

独り暮らしの女性が、そんない所に住めるものなのか？

俺だって、男一人で生きていけるぐらい稼いでいる。

しかし、学生時代のボロアパートこそ抜け出しはしたものの、とてもじゃないがこんな場所には住めない。

見たところ、部屋の広さは、俺の部屋の倍はあるぞ。

しかも、窓からの見える景色は、明らかに高層地帯から見えるものだ。

「お前、結構、稼いでいるんだな…。」

「まあね…。結構、割りがいい仕事だからね…。」

「仕事、何やってるの？」

「…、キャバクラ…。」

「はあー？」

「私が何してようが、タクちゃんには関係ないでしょ！」

「別に咎めてないよ。ただ、ちょっと意外だったただけで…。」

だから、酒が強いのか？

だから、こんなにいい所に住めるのか？

「別に体を売ってるわけじゃないし…、こつ見えても人気あるんだから…。」

別に、俺に言い訳する必要はないのだが…。

コイツは昔から、コミュニケーション能力というものが高かったから、天職とは言えるかも知れないが…。

それに、彼女の容姿は、世間一般の評価では、美人と言えるだろうが…。

「お前の両親は知ってるのか？」

「知らないと思うよ。こつちから言うわけではないし、聞かれもしないし…。ってというか、ほとんど連絡とってないし…。」

「お前、やっぱりまだ…。」

俺が石崎と話すようになったのは、高一の頃。

その時、コイツは父親と二人暮らしだった。

そのあとすぐ、石崎の父親は再婚した。

新しい継母とは、上手くいっていないらしい。

嫌われてるとか、嫌がらせをされているとかではなく、むしろ優しいらしい。

だが、お互いどう接していいかわからず、上手くいかないのだろう。家族間の意志疎通は、コミュニケーション能力云々では、どうにも出来ないこともある。

親の再婚がもつと小さい頃なら、それなりに上手くいくと思われるが、人間、年をとると適応力というのが低くなるのだろう。

俺の家も似たようなものだ。

俺の実母が、『新しいお父さんだよ』と男の人を連れてきた時の違和感は、大人になった今でも、鮮明に覚えている。

その時、俺はまだ小学生だったから、それなりに上手く適応出来た。

しかし、本当の父親だと今では思ってるが、心の奥底にある違和感を、完全に拭い去ったとは言い難い。

石崎は、高校を卒業すると、進学のために上京した。

まるで、複雑な家庭環境から逃げるように…。

俺も同じく上京したが、その後、お互い連絡をとっていない。

俺達は、高校時代、仲が良かったと言えば良かったのだが、所詮、その程度の関係なのだろう。

俺達の関係が、石崎が言うところの『親友』とやらだったら、10年も音信不通なわけではない。

単なる同級生やクラスメイトではなかったことは確かだが、言わば、似たような境遇を持つ同土みたいな関係だったのだろう。

「タクちゃん、次の休みいつ？」

帰り際、石崎に聞かれる。

「来週は土、日は休みだと思っけど。」

予定外の出来事がなければ…だが。

「じゃあ、土曜日は空けておきなさいよ！」

「命令するな！」

「そういう態度をとれる立場じゃないでしょ！今回の借りは、きっちり返してもらっからね！覚悟しておきなさいよ！」

「出来れば、お手柔らかに…。」

俺は自分の犯した罪を、どう償えば良いのでしょうか？

何でこつなる？

次の土曜日の朝、目覚まし音の代わりに、ケータイの着信音で起こされた。

『はい…川口です。』

『もしもし、タクちゃん？私！』

俺はまだ、オレオレ詐欺に引つ掛かる歳ではない。

『どちらの、私さん、ですか？』

声の主が、石崎香織であることは分かっているが。

『相変わらずアンタは、自分の立場というものが分かっていないよ  
うだね！』

『ハイハイ、すみませんね、体も態度もでかくて。』

『もー、あつたまきた！今から一時間以内に丁駅に来い！さもなければ、命はないと思いなさいよ！』

子供の喧嘩かよ…。

『しょうがないな、ボチボチ行くよ。』

『ボチボチじゃなくて、急いで来なさいよ！遅刻厳禁！繰り返す、遅刻厳禁！』

『分かったよ…。』

電話を切ってからおよそ三十分、ボチボチ家を出た。

まあ、何とか間に合うだろう。

丁駅の改札を抜けると、石崎はすぐに見つかった。

さすが人気キャバ嬢、人混みの中でも目立つ。

「遅い！」

「一時間以内には来ただろ？」

「アンタには、五分前行動の概念はないの？」

仕事なら当たり前だが、私生活にそんな概念は、俺に必要ない。

彼女は、両手に荷物を抱えている。

結構な量だ。

それを、俺に向かって無言で差し出す。

ハイハイ、持てっでことですね。

「『荷物、持とうか?』って、なんで先に言えないかなあ。これだから、モテない男は…。」

男が女に、口喧嘩でかなうはずがない。

ここは、言いたいことをグツと堪えて、素直に従っておくのが正解である。

荷物の中身は、ブランドバックやブランドアクセサリ、ブランド小物、未使用と思われる靴など。

仕事上の戦利品、ってやつだろうか？

この日、俺達が最初に向かったのは質屋。

荷物の中身を換金するようだ。

そして、可哀想なのは、大量の戦利品の贈り主達。

それとも、贈り主達は、こうなることを承知で貢ぐのだろうか？

垣間見た生活ぶりからは、お金に困っているようには見えなかったが。

それに、人気キャバ嬢ともなれば、俺より稼ぎがいいはずだが。

「こんなに大量に換金して、お金でも必要なのか？」

「まあね…。昨日で仕事辞めちゃったし。」

「はあー？」

「だから、何でアンタがそんなに驚くのよ！それに、今、住んでる所からも引っ越さないといけないから、荷物整理も兼ねて。」

それなら納得だが…。

「何でまた急に？」

人気キャバ嬢から無職に転落ですか？

「最近、色々あって、なんかめんどくさくなっちゃったから…。」

めんどくさくなったら、仕事は辞められるものなんでしょうか？

質屋で大量に換金した後は、近くのカフェに入る。

「勿論、タクちゃんの奢りだからね。」

「ハイハイ、分かっていますよ。」

特に高額というわけでもないカフェ代ぐらい、奢ってやるよ。

「これでチャラじゃないからね。」

俺の犯した罪は、どのくらい重いものなのでしょうか？

全く記憶にないことなのに…。

それに、そういうことは、例え記憶がなくても、それなりの感触というものが、残っていてもおかしくないんだが、それが全くないのはどういうわけだ？

それは、そういう行為に憧れを持った、童貞の妄想に過ぎないのか？

俺的には喜ばしいことなのに、何だか釈然としないものを感じる。

イヤ、待て、『喜ばしいこと』というのは、語弊がある。

それじゃあまるで、石崎を友人以上に見てしまっている、ということではないか？

再び、俺の頭は混乱してきた。

「あのさあ…、本当に申し訳ないんだが、この前、タクシーに乗ってから、朝起きるまでの記憶が、全くないんだが…。」

『困った時は、知ってる人に聞け！』

昔、ばあちゃんがそう言ってた。

「アンタの最低っぷりを、一から説明した方がいいの？」

俺は、無言で頷くしかない。

聞くに堪えない話でも、何も分からないよりは、幾分マシ…だろう。

ふんだんに彼女の主観を交えたその話は、予想していたものと少し違っていた。

とても三行では説明出来ないが、要約すると…。

一緒にタクシーに乗り込み、まず、私の家に向かう。

レディファーストだから当然でしょ？

今思えば、これが間違いの元だった、後悔はしている。

タクシーに乗るとすぐに、タクちゃんは眠りに落ちる。

家に着くまでには起きるだろう。

寄り掛かるな、重いから！

私の家に着いても、この男は起きない。

タクシーの運転手に、何とかしろ、お前の彼氏だろ、と勘違いされる。

運転手の奴ふざげんな、お前の車には二度と乗らない。

外に放置しようと思ったが、良心が咎めた。

仕方ないので、自分の家に連れて行く。

マンションの十階まで、180センチオーバーの大男を、か弱い女性が担いでいく羽目になる。

マジ重い、死ね。

部屋に入ると、大男は床に倒れ込んでいびきをかき始める。

素っ裸にしてベランダに放り出そうと思ったが、死なれては困るので止めた。

でも、一遍、死ね。

シワになったらまずいだろうと思ひ、スーツを脱がせてあげた私の優しさを、褒め称えなさい。

そして、毛布まで貸してあげた私を、神と崇め奉りなさい。

それから、朝起きると、大男の腹を踏んで転ける。

肘と膝に痣が出来た、治療費払え。

ということを、三十分ぐらいかけて説明された。

俺は、所々、命の危険にさらされている。

「それだけ？」

「『それだけ？』じゃねえんだよ、オイ！ふざけんな、コラ！」

だから、ガシガシと脛を蹴るのは止めなさい、痛いから！

それから、女性が男性を、汚い言葉で罵ってはいけません！

「俺は…、やってないの？」

バシッ！

「充分過ぎるほどやらかしてるだろ！」

その口に出すより先に、頭を叩かれた。

「ごもっともでございます…。」

「何ていうか…その…、男女間の行動というか、行為というか…ゴニョゴニョ…。」

「何をゴニョゴニョ言ってるの？謝罪の言葉は、はっきり言いなさい」

「いよ！まだ、許さないけど。」

「誠に、申し訳ございませんでした。以後、気を付けます。」

大袈裟に頭を下げ、許しを請ってみる。

「フン！」

姫様は、ご機嫌を治してくれません。

「今、聞いた以上のことは、俺はしてないの？」

「してないけど？」

「そうか…、良かった…！ってえー！」

「少しも良くないだろうが！」

本気で蹴るのは止めて！

涙が出てくるから！

その後、店を出ると、彼女の買い物に付き合わされた。

何かを買っわけでもないが、色々な場所に引っ張り回される。

そして、彼女の家の前に着いた時には、既に、日が落ちていた。

マンションの前で別れを告げ、帰ろうとするが…。

「ちょっと待ちなさいよ！今日は、一日付き合っつて約束でしょ？」

空けとけとは言われたが、一日中付き合えとは言われていない。

彼女の家に向かったから、これで解放されると思った俺は、少し甘かったようだ。

マンションの前で待ってるように言われ、彼女は一旦、自分の家に戻って行った。

そうか…、やってないのか…。

良かったのか、悪かったのか…。

これから、高級ディナーでも奢らされるのかな…？

金、足りるかな？

それなら、俺もこの格好じゃまずくないか？

そんなことを考えながら、待つことおよそ二十分。

「お待たせ！」

彼女は、先程までとは違い、かなりラフな格好に着替えてきていた。

こっちの格好の方が、彼女らしい気もする。

さっきまでの格好は、どこかしら無理しているようにも見える。

コンタクトレンズは外したのが、メガネ姿だった。

そっだよ、コイツ、高校二年の途中までは、メガネだったんだよ！

今より、遥かに地味だったし。

それが、キャバ嬢になるなんて、不思議なもんだ。

「これから、どこ行くの？」

「タクちゃんの家。」

「はあ？」

「外で飲んでもいいけど、タクちゃん、また潰れたら今度は死ぬかも知れないよ。私は二度と助けないから。」

「イヤイヤ、ちょっとは助けようよ！」

「ていうか、潰れるまで飲まずなよ！」

何でこうなる？

俺の家の近くで、大量の酒とつまみを買ひ、結局、彼女は俺の家に押し掛けて来た。

「せまつ！」

第一声がそれですか？

これでも、28歳男性の独り暮らしには、充分過ぎる広さなんですが。

一応、ヤバめものは片付けてあるし、先週の日曜日に掃除もした。少しだけ散らかってる物を片付け、酒類を冷蔵庫にしまっていると…。

「何してるんだ？」

彼女は、ベッドの下やら、本棚やらを物色している。

「エッチな本とかエッチなビデオとかは、どこにしまっただろうか」

なと思つて。」

コラコラ、何をしているんだね、キミは！

簡単に見つかる場所に、隠すわけがないだろ！

この家に、そういう類いの物が見つかったら困る相手は来ないのだが、長年の習慣からか、きっちり隠してしまう。

隠し場所を工夫しながら、少年は大人になっていくのだよ。

「ねえ、タクちゃん。」

「ああ？」

だいぶ酒が入ってきた頃。

「もしかして…、私とやっちゃったと思つてた？」

「何を？」

「『何を？』って、セックス。」

「ばっ、ばバカなことを…！！！！」

「やっぱり、そう思つてたか…。」

嫁入り前の女性が、口に出している単語ではないと思いますが…。

「酔っ払って記憶をなくした上に、知らない家で朝目覚めたら…、しかも、その部屋の主が女性だったら…、その可能性ぐらい考えるだろ?」

「童貞の妄想って怖いなあ…。」

「ど、どどど童貞ちゃうわー!」

「見栄張らなくても大丈夫だって。バカにしたりしないから。」

「…。」

「タクちゃん…、私としたい…の?そういうこと…。」

これが罠であることぐらい、俺でも分かる。

さすが元キャバ嬢、と言いたところだが、上目遣いで俺を見つめても、ダメですよ。

そんな手には、引つ掛かりませんよ。

「いいえ、全然。」

「あー、何かムカついた、その言い方!タクちゃんは、自分がどれだけ恵まれているか、考えた方がいいと思うよ!」

「どの辺が恵まれているって言うんだよ!」

恋人もおらず、高校時代の同級生の女に、虐げられているというのに。

「私と自宅で酒が飲めるなんて、本来は有り得ないことなんだよ。みんな店に来て、高い金払わないと、私とは一緒に飲めないんだから。」

コイツは、自分を何様だと思ってるんだ、無職のくせに！

そんな奴に逆らえない俺も、どうかしてるぜ…。

「そう言えば、キャバクラって簡単に辞められるものなのか？色々、引き止めとか、しがらみとかがあるんじゃないの？」

「普通はそうだけど、結婚するって言ったら、結構、簡単に辞められた。」

「はあー？お前、結婚するの？」

何か胸の奥底がズキズキしてきた。

「しないよ。」

「はあ？」

全く意味が分かりません！



お前、何してんの？

朝、目覚めると、見慣れた天井が視界に入ってきた。

ここは、間違いなく、俺の家である。

だがしかし、俺は毛布こそ被っているが、フローリングの床の上に寝ている。

俺の記憶が確かなら、今日は日曜日。

二週連続で、自分の置かれている状況の確認から、始めなければならぬ。

横を見ると、テーブルの上に、缶ビールの空缶やら、つまみの残りやらが散乱している。

反対側を見ると、ベッドがある。

本来、これは俺が寝る場所なのだが、別の誰かが寝ている。

今回は、寝るまでの記憶はちゃんとある。

そして、俺から寢床を奪った奴に対して、だんだん腹が立ってきた。

二日酔いでガンガンする頭を擦りながら、起き上がり…。

「コラー！起きろー！」

そう言いながら、布団をめくる。

「キャッ！」

「あっ、ゴメン！」

女性の悲鳴に慌てて、布団を戻しながら謝る。

俺の寝床を占有していた奴は、Ｔシャツとホットパンツを身に付けた女性だった。

昨日…。

俺は、高校時代の同級生である石崎香織の用事に付き合わされる。

先日、彼女に迷惑を掛けてしまったお詫びを兼ねて。

何故か、俺の家で酒を飲む流れになり、今に至る。

「オイ、そろそろ終電の時間だぞ。」

「いーの、いーの。今日は、ここに泊まってくから。」

深夜、俺は彼女に帰宅を促した。

それを断るということは、どういうことを意味するのか分かって  
いるのか？

今日の俺は、まだ酔い潰れていないんだぞ！

「俺は男で、お前は女であることを忘れてないか？」

「タクちゃん、私には何もしないんでしょ？」

ちよつと言葉にトゲがある言い方だ。

「でも、どこで変なスイッチが入るか分かんねえし…。」

男は、突然、狼になる場合があるのですよ。

「タクちゃんのそのスイッチ、壊れてるから大丈夫。」

完全に舐められております…。

「何で俺が、自分の寝床を譲らないといけないんだよ！」

「女性を床に寝かせて、良心は咎めないわけ？」

「ああ、咎めないね！だって、ここは俺の家だし。俺は帰って言ったのに、帰らなかったお前が悪いわけだし。」

「じゃあ、一緒に寝ようよ！」

「ふ、ふざけんな！そ、そんなこと出来るわけないだろ！」

「冗談なのに、何、マジギレしてんの？これだから、モテない男は」

「もういいよ、分かったよ！俺が床で寝るよ。」

結局、口では勝てません…。

彼女は、俺を電話で呼び出した時から、ここまです計算していたのだろう。

彼女が自分の家で着替えて来た時、少し大きめのバックに変わっていたが、その中にはお泊まりセットらしきものが入っていたようだ。

結局のところ、俺は彼女の手のひらの上で、踊らされていたに過ぎない。

それにしても、広い家があるのに、わざわざ狭い部屋に泊まらなくても…。

あの家に帰りたくない理由でもあるのだろうか？

「いきなり布団をめくるなんて、ホント最低！エッチ！死ね！」

俺は、感謝こそされ、罵倒される覚えはない…よな？

「悪かったよ…。」

コイツには借りがあるからか、どうにも強気に出れない。

「今日は、何しようか？今日は、タクちゃんの行きたい所に付き合  
ってあげる。」

コーヒーをすすりながら、彼女が言う。

どうやら、機嫌は治ったようだが…。

「何もしねえよ！ていうか、それ飲んだら早く帰れ！」

「ブー！」

膨れっ面してもダメです。

恋人じゃない女に、そんなことされてもウザイだけです。

恋人はいたことないけど…。

あくまで、想像でしかないんだけど…。

それに、コーヒーぐらいは出してあげるが、これ以上、コイツに付き合う義理はない。

借りはもう、充分、返しただろ？

そして、俺もコーヒーに口をつけようとした時、携帯電話が鳴った。

発信元は会社から。

俺の休日が、終了したことを意味していた。

「お前、いつまでいるんだよ！俺はもう行くからな！鍵は郵便受けに入れといてくれればいいから。早く帰れよ！」

「はい！」

いいお返事だが、どうにも嫌な予感がする。

仕事に、ではなく、彼女にだ。

その目は、女性特有の、何かを企んでいる時の目だ。

俺の母親と妹は、何かを企んでいる時、必ず、こつこつ目をしていてた。

「こんなことで、いちいち呼び出すなよ。俺は、アンタ達と違って休みだったんだよ。アンタ達は別の日に休みがあるけど、俺の休みは戻って来ないんだよ。」

取引先のクレーム処理から帰る道すがら、思わず、愚痴がこぼれる。たいしたトラブルでもなかった為、一旦、会社に戻ることにする。

待機している上司に報告したり、報告書を書いたりする必要はある。

上司への報告は、既に電話で済ませた。

報告書は、明日でもいいんだが。

どうせ家に帰っても暇だし。

夏の一日は長いが、帰る頃にはもう、日が落ちかけていた。

家の前に来て、自分の部屋をふと見上げると、電気がついていた。

アイツ、つけっ放しで帰りやがったな！

郵便受けから鍵を取り出し、ドアを開けると、なんだかい匂いがある。

美味しそうな御飯の匂いだ。

なんだ？

部屋の奥に入って行くと、テーブルに美味しそうな料理が並んでいた。

「あつ、おかえり！」

「ああ…、ただいま…。じゃなくて、お前、何してんの？」

「晩御飯を作ってるところ。もうすぐ出来るから、着替えたら？」

「そうじゃなくて、何でそんなことしてんの？帰ったんじゃないのかよ！」

「家には、一回、帰ったよ。タクちゃんの家って、料理道具とか、調味料とか何も無いんだね。私の家から少し持って来たから。心配

しなくても、代金請求とかはしないから安心して。」

「だから、そうじゃなくて!」

「どうせ、外食とかコンビニばっかりなんでしょ?そんな生活していると、メタボになっちゃうよ。高校時代よりも太ったでしょ?」

「だから...。」

お願いだから、俺の話聞いて下さい...。

「ど...ど...ど...?美味しい?」

ご褒美を待つ犬みたいな目をするんじゃないよ...。

「ああ...、美味しい...よ。」

「良かった!私、こう見えても、料理は得意なんだよ。小さい頃からやってたから!」

だったら、その特技を生かしなさいよ!

キャバ嬢なんかやってないで!

あっ、もう辞めたんだっけ。

「絶対、無理だつて！」

「これで、この前のことは、許してあげる！忘れてあげるから！」

何か裏があるとは思っていた。

「一ヶ月ぐらいは、今の所に住めるんだろ？その間に探せよ！」

「一ヶ月も住めないよ。それに、仕事を探す上に、住む所も探したら、一ヶ月なんてあっという間だよ。」

何か企んでいると思っていた。

「だったら、他の奴に頼めよ。大学時代の友達とか。」

「大学時代の友達は、みんな結婚しちゃったし。」

「キャバクラの元同僚は？」

「キャバクラの同僚に頼むなんて出来ないよ。タクちゃんは知らないだろうけど、水商売って裏じゃ酷いものなんだから！嫉妬と欲望が渦巻く……。」

嫌な予感は、的中してしまった。

恋人でもない男女が、一緒に住むなんて、どう考えてもおかしいだろ！

俺が、色々、我慢しないとイケないじゃないか！

「お前が置かれている状況は、理解したけど…。」

「ねっ！お願い！家事とかやってあげるから！今日みたいに、温かい御飯が食べられるよ！」

ヤバイヤバイ、元キャバ嬢って半端ねえな…。

つい、『うん』て言いそうになるじゃないか…。

「倫理上、問題があるというか…。」

「そこら辺は大丈夫でしょ。同棲じゃなくて、同居なんだし。それに、タクちゃんは、私とエッチする気はないんでしょ？」

「そっなんだけど…。」

男には、色々、複雑な事情があるわけで…。

「それとも、『体で払え』って言う？それならそれで、構わないけど。」

「言わないよ！言わないけどさあ…。」

頑張れ、負けるな、俺！

優雅な独り暮らしは、終わりを告げるんだぞ！

「…。」

だから、潤んだ瞳で見るのは止めなさい、ウザイだけだから！

あれ？でも、そんなにウザくないかも…。

「期限…。そうだ、期限を決めよう！」

あれ？事実上、同居を許可してしまったんじゃないか？

「期限は、私の新しい仕事と、新しく住む場所が決まるまで。」

話になりません！

どうしてこうなった？

「はぁー…。」

朝、洗面所で、歯ブラシを手にとろうとした時、大きな溜め息が出てしまった。

俺専用の使い込まれた白い歯ブラシの横には、同じく使い込まれた赤い歯ブラシが並んでいる。

どうしてこうなった？

溜め息の原因は、間違いなくアイツの所為だ。

こっちは、これから仕事だというのに、布団の中で、優雅に寝息をたてている石崎香織の所為だ。

石崎香織は、俺の家の居候である。

なし崩し的に、俺の家に転がり込んで来た。

同棲ではなく、同居である。

男女間の営みなどは、勿論ない。

彼女は、仕事と住む場所を探しながら、俺の家の家事などをしてい

る。

住み込みの家政婦みたいな奴だ。

彼女は、強引に同居を決めた翌日から、早速、身の回りの物などを運び込んで来た。

その荷物は、意外なほど少なかった。

女性に必要な身だしなみ道具や着る物、料理道具などだけだった。

電化製品やベッドなどは処分したと言う。

着る物も、いわゆる、キャバ嬢時代の戦闘服的なものは処分したらしく、多くはない。

布団は、新しい物を自分で買って来た。

おかげで、俺のベッドは、本来、使すべき人物である俺の物となった。

しかし、彼女の荷物が少ないとはいえ、男の独り暮らしの家に、住人が一人増えれば随分と手狭になる。

俺も、必要ないものは、出来るだけ処分した。

エロ本などの、男の必需品は、彼女にあっさり見つかり、勝手に処分された。

彼女は髪を切った。

茶色く、長かった髪は、肩の上辺りまで切り、色も黒くしてきた。

就職活動中だから当たり前だが。

コンタクトレンズは、金が掛かるからと、普段はメガネで過ごしている。

派手なメイクは控え、必要最低限のメイクでいる彼女は、高校生の頃のイメージに近い。

「これで制服なんか着たら、充分、高校生で通用しちゃうんじゃない？」

髪を切ってきたあと、彼女はそんなことを言っていた。

「それはさすがに、無理があるだろ？シワや肌の張りで、すぐバレる…痛い！」

だから、口より先に手を出す癖は止めなさい！

俺の心は、梅雨空のように晴れない。

まるで、今日の天気のように…。

あれ？何か、今日は寒気がするな。

風邪でも引いたか？

昼頃、俺の体調は、かなり悪化してきた。

寒気どころか、動くのもしんどい。

「タクさん、調子悪そうですね、大丈夫ですか？」

後輩の加賀美由紀に、心配そうに声を掛けられた。

彼女は、経理担当で、俺の三歳下。

清楚で可愛らし娘だ。

誰かさんとは大違いで。

実は、最近、加賀ちゃんとは、ちょっといい感じだったりする。

「結構しんどいけど、何とか大丈夫。」

今出来る、最大限の笑顔で応える。

「無理しないで下さいね。」

加賀ちゃんは、優しい笑顔を向けてくれる。

ホント、いい娘だなあ。

「おい、タク！お前、今日はもう帰れ。そんな状態じゃ、仕事にならないだろ。」

昼過ぎ、半ば強制的に上司の命令で帰宅させられた。

特に、急ぎの仕事もないし、早退出来るのは、正直、ありがたい。

しかし、何となく、気が引けるのは、俺が歳をとったからなのだろうか？

病院に寄ってから家に帰ると、俺の家に住み着いている家政婦みたいなお方は、俺の真っ青な顔に驚いていた。

「朝から調子悪かったの？」

「まあ…。」

「何で言ってくれなかったの？」

言ったところで、お前は何も出来ないだろうが！

それに、俺が家を出る時は、まだ、夢の中だっただろ？

「今日一日ぐらい何とかなると思ったから。明日は休みだし。」

「お粥でも作るから、それまで寝てて！」

促されるまま布団に入り、何気なく彼女を見る。

「…。」

「ん？タクちゃん、何でニヤけてるの？風邪で頭までやられちゃった？」

「ニヤけてねえよ。」

考えていることが、顔に出てしまったようだ。

病気の時に心配してくれる人がいるのは、嬉しいことなんだな…と。

それから、どれくらい時間が経っただろうか？

「タクちゃん！お粥出来たよ。何か食べないと、薬が飲めないですよ？」

石崎の表情は、俺の体調を心配してなのか、真剣そのものだった。

こういう時に、隣にいてくれるのが、恋人や奥さんだったら、もっと嬉しいのかな？

次の日には、熱も下がり、日曜日には、体調はすっかり元通りになった。

「そういえば、私、仕事が決まったよ！」

ようやく、第一段階進んだか。

「どいっ？」

「この近所のコンビニ。来週から行くことになったから。」

「はい？」

それは、仕事が決まったとは言わないのでは？

だって、バイトだろ？

そんなんじゃない、自立なんて無理だろうが！

「その店長さんと、顔馴染みになったから、『私、仕事探してるんです』って言ったら、『履歴書持って来たら、うちで雇ってあげる』って言われたの。一昨日、履歴書持って行ったら、本当に採用になっちゃった！」

「その店長ってどんな人？」

「違うだろ、突っ込むところはそこじゃないだろ！」

何を言ってるんだ、俺は！

「気さくな、普通のおばちゃんだよ。その人曰く、サービス業は、愛嬌とか愛想っていうのが重要らしいのよ。仕事はそのうち覚えるけど、愛嬌とか愛想は生まれ持ったものが重要だって。」

「面白そうな人だな。」

だから、何を言ってるんだ俺は！

静かな暮らしを取り戻したくはないのか！

「『アンタは愛想もいいし、若くて可愛い娘だから合格』って言われちゃった！」

「お前、そんなに若くないだろ。」

という言葉は、辛うじて飲み込んだ。

危ない危ない、また蹴られるところだったぜ！

「働くにあたって、保証人が必要らしいんだけど。店員が売上金を持ち逃げしたりする場合があるから、念のためらしいのよ。タクちゃん、書類に名前書いてね。」

「俺なんかでいいの？」

「身元がしっかりしてれば、同棲中の彼氏でいいって！」

「俺はお前の彼氏じゃない！それに、同棲じゃなくて同居だ！」

「細かいことはいいじゃん！それに、同棲中の彼氏ってことにしておいた方が、色々、都合がいいの。」

俺は良くない！

何だか、なし崩し的に同居の延長が決まってしまった気がする……。

それも悪くないと思った俺は、まだ、どこかおかしいのだろうか？

そして、月曜日……。

珍しく、イヤ、初めて、俺より早く、彼女が起きていた。

「おはようー!」

何か作っている彼女は、ご機嫌がよろしいようです。

「おはよう。今日からバイトだっけ?結構、早い時間から行くんだな。」

典型的な夜型人間の彼女のことだから、もっと遅い時間からだとはかり思っていた。

「タクちゃんよりは、遅く出てくよ。でも、お弁当を作ろうと思つて、早起してみました!」

「へえー。」

「タクちゃんの方もあるからね!」

「はあ?お、俺の分はいらないよ!」

ヤバイ、俺、顔が真っ赤じゃないか?

「一人分も二人分もたいして変わらないから。どうせ、昼は外食ばかりなんでしょ?お弁当は、健康にも良くて、節約にもなるんだから。」

彼女は、もっと金銭感覚がおかしい奴だと思っていた。

俺は、偏見を持って彼女を見ていたことを、恥じなければいけないかも知れない。

「あつ、タクさん！もう体調はいいんですか？」

お昼休憩の為に、休憩室に行こうとした時、偶然、加賀ちゃんと一緒になった。

「もう大丈夫だよ！」

「今日はお弁当なんですネ。私もそうなんです、一緒にしてもいいですか？」

「勿論！」

お弁当最高！

石崎、グツジョブ！

「でも、タクさんって独り暮らしですよネ？自分でお弁当作るんですか？」

「ま、まあね…。」

「凄いですね。私なんか、いい歳して、お母さんに作ってもらって

るんです。朝起きれなくて…。」

そう言っつて顔を赤らめる加賀ちゃん。

その顔は、はっきり言っつて反則である。

そんなことを思いながら、俺は何気なく弁当箱の蓋を開けた…。

「…！」

そして、慌てて閉める。

「あっ！」

加賀ちゃんには、バッチリ見られたようである。

ハート型に切り抜かれた海苔が、御飯の上に乗っていたことを…。

「あの、こ、これはね…。」

「なーんだ、彼女に作ってもらってるじゃないですか。何で自分で作っつたなんて言っつたんですか？私、彼氏に作っつてあげたことないですよ！いい彼女さんですね。」

思いもよらぬ形で、失恋確定である…。

その時、俺の携帯が鳴っつた。

石崎からのメールだっつた。

『タクちゃん、もうお弁当食べちゃった？言い忘れてたことがあったんだけど、他の人に見られると恥ずかしいから、お弁当は一人で食べてね、てへっ！』

絶対、確信犯だろ、これ！

『覚悟』つてなに？

「あー、暑い！ねえ、クーラーつけていい？」

「ダメだ。まだ、扇風機で充分だ。」

「ブー！タクちゃんだって、俺のような汗を流してるくせに！余計に暑苦しんだけど！」

「うるさい！暑い暑い言ってる奴の方が、暑苦しいんだよ！」

学生達が夏休みに入った頃の夜、くだらない言い争いをしている俺達。

クーラーぐらいつけてもいいんだけど、貧乏性の俺はクーラーというものが苦手だ。

無くても問題ないのに、あるから使ってしまう。

一度、使ってしまうと手放せなくなる。

クーラーには、麻薬のような中毒性がある。

俺達の奇妙な同居生活は、既に、二ヶ月になるつとしていた。

『お弁当事件』以来、俺が同棲しているという話は、会社に広まっ

てしまった。

あれ以来、毎日のように弁当持参で来るのだから当たり前だが。

俺は、特に否定も肯定もしていない。

それは、一々説明するのがめんどくさいのもあるが、石崎との同居に、俺が居心地の良さを感じ始めているから…かも知れない。

居心地が良いと感じ始めた理由も、何となく分かっているが、その理由については、出来るだけ考えないようにしていた。

それにしても石崎の奴、そんな格好でうるつくんじゃないよ！

色々な問題が起こるだろうが！

汗で光った胸元や、太ももはあまりに刺激が強すぎる。

その日、結局、誘惑に負け、クーラーという名の麻薬に手を出してしまう。

石崎は、ビール片手に寝転がりながら、テレビを見ている。

いい身分だな、オイ！

俺は、休日出勤から帰宅し、持ち帰った仕事を片付けている。

俺は、仕事が片付くまでは、ビールではなく、麦茶で我慢。

「ねえ、タクちゃんってホモなの？」

「ブツ！そんなわけないだろ！どうしてそうなるんだよ！」

突然、何を言いだすかと思えば、コイツは！

彼女の唐突な問いかけに、麦茶をこぼしそうになった。

「そうだよね…、やっぱり違うよね…。エロ本だって、ちゃんとあったし…。」

「お前に、勝手に捨てられたけどな！一言、断ってくれても…ブツブツ…。」

思い出したら、腹が立ってきた！

「でもさあ…。自分で言うのもなんだけど、私って器量良しじゃん。スタイルだって悪くないじゃん。女性としての魅力に溢れてるじゃん。それなのにタクちゃんは、少しも手を出して来ないじゃん。だから、女性に興味ないのかなあと思って…。」

こっちは、鉄のように硬い理性で、色々、抑えてるんだよ！

「お前は、外見はいざ知らず、性格が…。」

「ん？何か言った？」

危ねえ…、聞こえてなくて良かった。

「俺は、女性にはおおいに興味はある。お前に対しての『スイッチ』だけが壊れてるんだろ。」

嘘だけど、そう答えるしかない。

「何よ、それ…。私さあ…。一応、覚悟はしてたんだよね…。」

「『覚悟』って何を？」

その時、携帯電話がなった。

『もしもし、タク？』

『何だよ、電話なんかしてきて！』

声の主は母親だった。

『今年のお盆休みは、絶対に帰って来なさいよ、彼女と二人で！』

『何だよそれ！イヤミか？』

『だって彼女いるんでしょ？京ちゃんが言ってたよ。高校時代の同級生なら地元は一緒なんでしょ？』

なんで、俺の妹がそんなこと言うんだよ！

正月以来、会ってもいないのに。

『京子が何を言ったか知らないけど、彼女はいません。お盆は帰れ』

るかどうかわかりません。以上!』

どうにも噛み合わない、母親との会話だった。

「タクちゃんの妹って、来年、大学生なんだよね?」

電話を切ったあと、彼女は話を続ける。

俺の質問は、当然のようにスルーである。

「そつだよ。大学に受かれただけだな。」

俺とは10歳違いだから、今年、高校三年生である。

「あんまり、似てないよね。」

「会ったことあったか?」

石崎が俺の妹に、会ってるはずはないんだが…。

「お父さんは違うんだよね?」

俺の質問が、時々、スルーされるのは何でしょう?

「母親は一緒だけだな。」

うちの母親が再婚してから、妹は生まれた。

この話は、高校時代にしたかも知れない。

「タクちゃんって、妹のことが好きだったりするの？男と女的な意味で。」

「はあー？そんなわけないだろ、気持ち悪い！」

「プッ、同じこと言ってる！」

「『同じこと』ってどういう意味？」

「今日、タクちゃんの妹さんが来たんだけど、その時、彼女にも同じ質問をしたから。」

「はあ？来たってどこに？」

「この家に。大学の下見に来たついでに寄ったみたい。タクちゃんのお母さんに言われて来たみたい。」

「何故、それを早く言わないんだよ！」

「だって、言おうとしたら、電話が掛かってきたみたいだったから。」

コイツは、天然なのか、計算高いのか、よく分からなくなってきた。ようやく話が繋がったが、コイツの所為で、また、誤解した奴が増えた。

それ以降、彼女は黙り、おとなしくテレビを見ていた。

俺も話し掛けることもなく、仕事を片付ける。

色々、確認したいことはあったが、終わってからでいいだろうと思っていた。

そして、仕事を片付け、ビールを取りに行こうとした時、彼女が寝ていることに気付いた。

彼女の格好は、キャミソールみたいなやつに、例によってホットパンツ。

胸元からは、両胸の谷間がはっきり見える。

慌てて視線を反らすも、細いウエストが目に入ってくる。

お腹の辺りは、はだけており、おへそが見える。

またもや視線を反らすが、今度は細くて白い太ももが視界に入ってきた。

これは試練なんだ、俺は試されているんだ！

そう自分自身に言い聞かせ、その場から逃げるように冷蔵庫に向かい、缶ビールを取り出して、その場で一気に飲む。

体が熱くなり、鉄の理性は溶けて無くなりそうだった。

手に持った缶ビールをテーブルに置くと、彼女が使っているタオル

ケットを取り出し、彼女に掛ける。

その時、俺の手が彼女の体に、一瞬、触れた…。

触れたと言うより、かすっただけだが、俺の理性は溶けて無くなった。

彼女の様子を伺いながら、そっと、彼女の指先に触れてみる。

細くてしなやかな、女性らしい指だ。

そっと、腕にも触れてみる。

スベスベしていて柔らかく、少し熱を持っていた。

ここから先はダメだ…、ということは頭では分かっている。

しかし、俺の手は、自分の意思とは関係なく伸びていった。

彼女の胸元の膨らみに、今にもその手が届きそうだった。

「そこから先は…。」

「…！」

彼女の胸に触れる直前、声がかして、慌てて手を引っ込める。

「触りたければ触ってもいいけど、触るだけで終わる？」

俺の衝動的な欲望は、彼女に気付かれてしまった。

「なっ、何を、いつ、言ってるんだお前！タオルケットを掛けようとしてただけだよ！」

俺は、この期に及んで、見苦しい言い訳をするしかない。

「別に、タクちゃんのしたいようにしていいけど、それには、それ相応の覚悟が必要だよ…。」

「『覚悟』って何だよ！ば、バカじゃね！」

俺は、テーブルの上にあった缶ビールを慌てて掴み、ゴクリと飲む。

その手は、自分でも分かるぐらい震えていた。

「もう、仕事は終わったの？」

「あ、ああ…。」

その日、彼女はこの件について触れることは無かった。

次の日から、彼女が変わった様子は無く、あの件にも触れてこない。

しかし、何かを警戒しているように感じる。

それは、やましい気持ちがあるから、そう感じたただけだろうか？

俺は、衝動的で軽率な行動を、後悔するしかなかった。

どこへ行ったのだろうか？

あんなことまでしておいて、今さらごまかしても意味はない。

『俺は、石崎香織が好き』

これは、俺がずっと否定してきた気持ちだ。

偶然、彼女に再会し、高校時代のように、またふざけ合うようになってからずっと…。

もしかしたら、高校時代も好きだったのかも知れない。

俺の中にどんどん踏み込んで来て、俺を掻き回す。

そんな石崎のことは、苦手だと思っていた。

しかし、苦手なはずなのに、一緒にいるのが苦ではない。

むしろ、居心地が良いと感じる。

それは、彼女のことを好きだということに、繋がるのではないだろうか？

俺は、奇妙な同居生活を解消したい。

彼女とセックスしたいわけじゃない。

ただ、彼女に触れていたい。

しかし、彼女には警戒されている。  
それなら、触れられなくてもいい。  
ただ、そばに居てくれるだけで…。

「お前さあ、俺と再会した時、泣いてなかったか？」  
今まで、得体の知れない何かに止められていた言葉を、ついに吐き出してしまった。

酒の力を借りてではあるが、ついに言葉に出してしまった。

「やっぱり、気付かれてたか…。そんな私を、チラチラ見ているアホがいることに気付かなかったのは、一生の不覚だよ…。」

「見てねえし…。」

「絶対、嘘だね！バツチリ、目が合ったし。私は、泣いてる姿も絵になるから困っちゃう！」

「あの日、何かあったのか？」

「ちよつとー！私のボケはスルー？」

ビールを飲みながらの二人の会話に、以前と変わったところはない。終電が無くなるまで飲み明かした日と、何ら変わらない。

彼女が、缶ビール片手に、妙に、テンションが高いことを除けば…。

「言いたくなければ、無理には聞かないけど…。」

俺の態度を見て、彼女も少し真剣な表情に変わった。

「あの日、男にふられたの…。ふられたというより、関係を終わらせたというか…。」

「そうなのか…。」

彼女が少し言い淀んだので、それ以上、深くは聞かなかった。

「私って、結婚に向いてないんだよね、きつと…。料理だって、家事だって、ちゃんと出来るのに、何でだろうね…。いつも、その遙か前の段階でつまづいちゃう…。」

「お前も結婚願望はあるんだな。」

「そりゃあ、あるよ！でも、このままだと、一生一人ものだけどもね…。仕方ないので、タクちゃんに永久就職しようかな？」

そう言って、いつものように、俺をからかうような視線を向けてく

る。

「お前がそれでいいなら、俺は構わないよ。」

これは、少しズルい言い方だった。

「えっ…、ちょ、ちょっと、真面目にとらないでよ！」

そう言った彼女は、ここ最近していたように、警戒のアンテナを張ったようだ。

ここを逃したら、チャンスは二度とないかも知れない。

彼女がいなくなっただけからでは遅いのだ。

「俺さあ…、そろそろ、この同居生活を止めにしたんだけど…。」

「それって…、私に出て行って言ってるの？」

彼女は、いつになく真剣な表情で、俺の真意を図ろうとしている。

「違う、出て行く必要はない。」

「言ってる意味が分からないん…だけど…？」

「『同居』を『同棲』に変えないかってこと。」

「えっ…。」

彼女は絶句したまま、考え込んでしまった。

彼女は、断る理由を探しているのだろうか…。

「タクちゃんて、私のこと好き…なの？」

しばらく考え込んでいた彼女が、おもむろに、口を開く。

「ああ、好きだよ。」

俺の心に迷いはない。

「いつ…から…？」

「高校の時からだよ。」

「嘘…。タクちゃん、本当は、私とセックスがしたいだけでしょ！  
体が目当てなら、他を当たって！」

彼女は、俺を責めるような目つきになる。

「そうじゃない！」

何とか、俺の気持ちを、コイツに分からせないといけない。

「迷惑を掛けられたお詫びに、体で払えって言っなら…、一回ぐら  
いやってもいいけど。」

「だから、そういうことじゃないって言ってるだろ！」

彼女は、言葉の内容とは裏腹に、少し怯えている。

俺が、声を荒げたことが、更に拍車をかける。

「遅すぎるよ……。」

彼女は、一言だけ呟いた。

「『遅い』って何が？」

俺の気持ちだが、中々、彼女に伝わらず、苛立ちがつのる。

「全てが……。もう、この話はおしまい！さあ、飲もう！」

話は強引に打ち切られ、答えは聞けなかった。

しかし、俺がふられたことは理解した。

明日から、どうなるんだろう？

はからずも、この奇妙な同居生活は、終わりが近いことを感じた。

翌朝、彼女に何ら変わったところはなかった。

いつものように、弁当を渡され、仕事に行く俺を、いつものように見送る。

警戒はされていないように感じた。

しかし、俺は、胸騒ぎがして仕方なかった。

その日、仕事を終え、帰宅すると、案の定、彼女は姿を消していた……。

郵便受けに、彼女に渡した合鍵が入っていた時、血の気が引く思いがした。

慌てて部屋に入ると、書き置きと思われる茶色い封筒に入った手紙が、テーブルの上に置かれていた……。

部屋は綺麗に片付けられており、クーラーを消してからそれほど時間が経っていないと思われ、真夏だというのに部屋は少し涼しい。

それは、ついさっきまで、彼女がここにいたことを知らせている。

着替えもせず、俺は家を飛び出す。

駅で彼女の姿を必死で探す。

見つかるわけではない。

彼女に電話を掛けてみる。

『お客様の都合により繋がりません』と言われる。

当然のように、メールも送信出来ない。

彼女が働いていたコンビニにも行ってみる。

店長らしき人に、昨日で彼女が辞めていたことを知らされた。

一週間ほど前に、急に辞めさせて欲しいと言われたらしい。

丁度、あの事件があった時だ。

何か事情がありそうだから、引き留めなかったけど、勿体ないと嘆いていた。

愛想がよくて、勘のいい娘だったのに、と言っていた。

何でちゃんと捕まえておかなかったの！と怒られてしまった。

俺は、謝ることしか出来なかった。

何か手掛かりがあるかも知れないと思い、書き置きを何度も読んだが、それらしきものは見当たらなかった。

翌日、会社を休み、彼女が、前に住んでいたマンションにも行って

みたが、人が住んでいる気配はなかった。

ここで、俺と彼女の接点は途絶え、彼女のことを何も知らない自分に気付かされた。

彼女のことを何も知らないのに…、知ろうとしなかったのに…。

彼女は、どこへ行ったのだろうか？

俺に、知るすべは残されていない。

## 特別編（前書き）

この章は、全編に渡って石崎香織の書き置き手紙の内容です。

## 特別編

タクちゃんへ

突然、居なくなっでごめんなさい。

でも、こうするしか方法が思いつかなかったの。

始めに断っておくけど、私が出て行くのは、タクちゃんの所為じゃない。

タクちゃんのことを、嫌いだからじゃない。

タクちゃんのは、好き、大好き！

でも、昨日のタクちゃんの告白は、高校生の時に聞きたかったなあ。

それなら、何の迷いもなく、タクちゃんの大きな胸に飛び込んで行けたのに。

まさか、10年も経ってからタクちゃんに再会出来るなんて思っ  
てなかった。

しかも、都会の真ん中で、お互い恋人もいない状態で。

フリーなのは、タクちゃんは年齢と一緒にだけど、私は数時間しか経

っていなかったけどね！

結構、運命的だと思わない？

でも、無条件にそれを受け入れるには、私達は歳をとり過ぎちゃったのかな？（ちょっとババくさいけど）

タクちゃんの気持ちは、すごく嬉しい。

何の迷いもなく、それを受け入れることが出来たらと思う。

でも、私の全てをタクちゃんに受け入れてもらうのは、図々し過ぎる気がするの。

私って、男運が悪いつていうか、男を見る目がないんだよね。

そんな私の遍歴を、タクちゃんに引かれるのを承知で、書いてみるね。

まず最初は高校生の時…。

その人のことは、三年間、ずっと好きだったけど、鈍感な奴で、全然、振り向いてもらえなかった。

好きになってもらおうと、色々、努力したのに！

誰のことだか分かる？

お前だよ、お前！

この手紙を読んでもるタクちゃん！

二人目は、大学生の時の先輩。

色々、アプローチされてるうちに、何か好きになっちゃった…気がしてた。

初めてもその人。

でも、酷い男で、私のことは遊びで、他に本命の彼女がいた。

上京したての世間知らずの女を騙すのなんて、わけないことだったんだろうね。

でも、頭に来たから、その本命の彼女との中をめちゃくちやにしてやったけどね。

その所為で、『私はヤバイ女』っていう噂が広まって、他の男が寄り付かなくなっちゃったけど、後悔はしていない。

三人目は、数に入れていいのか分からないんだけど…。

ナンパしてきた男。

飲みに行った後、そいつにのこのこ付いて行ったら、セックスしておしまい。

やることやった後、連絡先も聞かれず、サヨウナラ。

名前も覚えてない、ていうか、聞いた記憶もない。

四人目は、最も酷い奴だった。

社会人になってから、友達に紹介された奴。

何か、軽そうな男だったから、付き合う気はなかったんだけど。

気が付いたら、付き合うことになってた。

気が付いたら、私の家に転がり込んで来てた。

気が付いたら、その男は仕事もせず、遊び歩いてた。

気が付いたら、借金の保証人にされ、そいつは私の前から姿を消した。

そして、私には借金だけが残った。

何やってんのお前って呆れるでしょ？

私自身でも呆れるもん。

とりあえず、借金は返さないといけないから、仕事を辞め、キャバクラで働き始めた。

五人目は、そこで知り合った。

結構、大きな会社の御曹司で、私のことを気に入って、指名してくれるようになった人。

ポロッと借金のことを話したら、ポンと肩代わりしてくれた。

お金って、あるところにはあるんだね。

ただ、肩代わりには条件があって、無利子で構わないけど、彼に返すこと。

彼が指定した所に住むこと。

たまには、彼に抱かれること。

いわゆる、愛人契約みたいなものだね。

それでもいいと思った。

とりあえず、借金に追われる日々は終わるし、いい所に住めるし、彼は優しかったし。

『借金が終わったら、結婚しよう』って言われた時は、単純に嬉しかった。

酔った勢いだっただけだね。

彼のことが、好きになったのかも、と思った。

でも、借金が終わっても、関係は今までと変わらないままだった。

更に、あるうことが、他の人とお見合いして、そのまま、結婚するかもとか言い出した。

まあ、私は所詮、水商売だし、本気で結婚出来るとも思ってたんだけどね。

今思うと、『彼のが好き』と思ったのは、勘違いだったんだろ  
うね。

それである日、タクちゃんと再会する数時間前、彼に呼び出された。

『関係を精算しよう』と言われると思ってた。

手切れ金を渡されたら、突っ返そうとも思ってた。

でも、あの男は笑顔を交えながら、『俺が他の人と結婚しても、キミとの関係は今まで通りだよ』とかほざくわけだよ。

もう、呆れたね、胡散臭い笑顔に寒気がした。

『ぶざけんな！』って言って、水をぶっかけてきた。

まさか、ドラマみたいなことを、自分でもするとは思わなかったよ  
…。

自分自身が情けなくて涙が出てきた。

それで、駅のベンチで泣いてたら、私をチラチラ見てる男に出会ったってわけ。

再会した時は、タクちゃんの家で、転がり込むつもりはなかった。

色々、めんどくさくなったから、仕事は辞めて実家に帰るつもりだった。

でもね、タクちゃんといると安心するのよ、高校の時からずっと。

変に、肩肘張らなくてもいいっていうか、素の自分を出せるっていうか。

ちよつとだけ、タクちゃんとの結婚生活の擬似体験でもしてみようかなって思った。

ほんの出来心で始めたことで、反省はしている。

それが、二ヶ月も続くとは思っていなかったけど。

タクちゃんが、私に手を出してきたら終わりにすればいいや、一回だけならいい思い出に出来る、そんな都合のいいことを考えてた。

タクちゃんは、いい思い出に出来るようなことじゃないのにね、本当にごめん。

最初は、持って一週間だと思ってたから、仕事なんか探していなかった。

でも、二週間近くなってくると、暇だからちよつと働こうかなって

思った。

すぐ辞められるような仕事を探そうと思ってたら、上手い具合に見つかった。

コンビニの店長には、悪いことしちゃったから、タクちゃんからも謝っておいて。

期間が長くなってくると、色々な情もわいてくるよね。

タクちゃんの話は、また、好きになっていくし、タクちゃんも『早く出てけ』って言わなくなるし。

私達は、一度、その『情』を断ち切らなきゃいけないと思う。

一週間前のあの日、私が声を出さなかったら、私達はどうしてただろうね。

最初に、手を触られている時から気付いていたけど、気付かないふりをしてた。

だって、本当に愛しそうに触ってるんだもん。

あそこで、声を掛けたのは、タクちゃんの気持ちを確認かめたかったから。

体だけが目当てなのか、私のことが本当に好きなのか。

その後のタクちゃんの行動を見てれば、後者なのは分かったけどね。何か知らないけど、タクちゃん、自分のことを責めてるんだもん。ちよつと可笑しかった。

ただ、結婚生活の擬似体験は、終わりにしないといけないと思った。昨日も、別に、手を出して来ても良かったのに。

私は、タクちゃんの気持ちごと受けとめる準備はしてたのに……。もう、最後の夜だと分かってたから……。

今日から私達は、かくれんぼをしようと思います。

タクちゃんの参加は自由です。

最初から参加しなくてもいいし、途中で止めても構いません。

ルールは簡単です。

タクちゃんに行き先を告げずに、私は出て行きます。

タクちゃんは、私を探して下さい。

ヒントは、私には住む場所が今はない、ということですよ。

住み込みの仕事でも探そうかなあ。

二人の接点が、一度切れた時、二人の運命はどう動くと思う？

『偶然も、二回続けば必然だ』って、誰かが言ってたけど、それでも私達が再会した時は、それは運命以外の何者でもないよね？

その時は、私も無条件で運命を受け入れます。

別の土地で再会するなんて、どれくらいの確率なんだろうね。

その時、お互い独り身の可能性なんて、もっと低いよね。

私は独り身の可能性は高いけど、タクちゃんは、絶対、結婚してると思う。

もう、会うことがないかも知れないから、先に言っておくね。

私はタクちゃんが好きです。

今までありがとう。

さようなら。

P・S・

もし…、万が一…、タクちゃんが私を見つけたら…、その時は、有  
無を言わず、私と結婚してもらっからね！

覚悟しておきなさいよ！

香織

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4494z/>

---

奇妙な同居

2011年12月24日09時50分発行